

# ニュージーランド・オークランド大学 School of Asian Studies 授業見学報告

見学者・報告者

小暮良幸, 柴田佳夏, 朴有眞, 吉田裕子, リュー・チャイー, 早川直子

2004年3月23日(火) 10:45-15:00

## 1 オークランド大学について

オークランドの中心部に位置するオークランド大学は1833年に創立された。ニュージーランド最大の学校で、学生数は26000人。研究が基本となっている学習プログラムが認められ、世界中から多くの学生が入学を志望する。現在60ヶ国から1000人近くの学生が集まってきている。本校の3つのキャンパスには全部で7つの学部があり、教育活動と研究活動が行なわれ建築学、不動産、芸術、人文科学、ビジネス、経済学、技術工学、法学、医療科学・健康科学、科学などについて学べる。それらに加え、さらに30種類以上の学問の境界を超えた学際的な授業も行われている。

## 2 School of Asian Studies について

日本文化、日本文学、言語に関する知識を広げることが目的とされている。語学コースでは既習者はもちろん初心者であっても最終的に日本人向けの文書が読めるだけの力をつけさせる。日本、ニュージーランド両国を結ぶ貿易は文化の理解とともに発展を続けており、日本はニュージーランドにとって現在第2位の貿易相手国になっている。

学部では文化、社会、文学、歴史、ポップカルチャー、言語のコースがあり、生の資料を取り入れながら学習する。上級レベルでは社会、文化、文学、歴史、言語がより専門的な内容になる。大学院では各自の専門領域で研究がされ、言語学、歴史学、翻訳、文学、哲学、第二言語としての日本語教育学などの課程がある。

日本語のクラスをとっている学生は一学年100人~120人前後で教科書は『ようこそ』『文化中級』を使用している\*1。

---

\*1 詳しくは、[http://www.arts.auckland.ac.nz/subjects/index.cfm?S=S\\_JAPANESE](http://www.arts.auckland.ac.nz/subjects/index.cfm?S=S_JAPANESE)

## 3 授業見学・感想

### 3.1 1年生

担当 Tomoko Shimoda 先生

学生数 約 20 名×3 クラス

使用テキスト 「ようこそ1」

#### 3.1.1 授業の流れ

■語彙チェック OHP で問題を見せ、学習者は日本語の単語は英語に英語の単語は日本語にしていく。答えを教師が読み上げ、学習者は自分の答えを自己チェックする。

■復習 X は Y です。教師が写真を見せ、学習者が発話する。

■パーソナルインフォメーション 初対面の場面で行う質問を学習者に聞きながら板書していく。

E.g. お名前は？ ご出身は？ お住まいは？

学習者が見学者に対して質問を行う。その後学習者同士がペアになり、お互いに聞きあう。見学者も学習者と組み、このタスクを行った。

■テキスト 教科書のアクティビティの部分をする。\*漢字：3文字導入

#### 3.1.2 感想

海外での初級前半のクラスを見学したのは、初めてだったので、実際どのように授業が流れていくかを追っていたが、授業はとてもスムーズに流れていたと感じた。その1つの要因にほとんどの学生が英語を話すため、英語での解説を加えれば共通理解が得やすいというのがあったと思う。日本での授業とはそこが異なっていたと思う。細かい点に関しては、せっかく共通理解が得やすいのであれば、「お～ですか？」「ご～ですか？」などの質問をする練習の際に、「お／ご」を用いない場合もあることを説明したほうが良かったのではないかと感じた。実際、「お／ご～ですか？」は、先生などの相手には良いと思われるが、学生同士などの会話では相手との距離を非常に作ってしまう気がした。  
(小暮良幸)

私たちが授業を見学させていただいた際、先生は、私たちも参加できるように授業を進めてくださった。その中で、実際に学習者と接しながら、私は以下のことを感じた。日本に比べて日本に関するリソースが少ない海外においては、ことばを含め、学習者が生の日本について触れる機会は限られている。しかし、だからこそ、学習者が初級の段階でネイティブスピーカーなどと接する機会を取り入れることは、新鮮であり、ことばを学ぶ上で、学習者の動機、意欲に影響を与えるかもしれないと感じた。また、個人にとって意味のある内容があつての表現の手段としてのことばという観点から、習った表現を用いて自分のことについて発信するという学習者同士のペアワークはよい

機会であると思われた。しかしながら、このように人数が多いクラスでは、学習者の参加度、習得度などの点で、課題があるようにも感じられた。(柴田佳夏)

学期が始まってから2週間しか経っていなかったので、学生はまだ簡単な挨拶をするレベルだった。留学生や移民者がクラスに多いことにまず驚いた。やはりニュージーランドやオーストラリアの場合、海外の日本語教育現場でも学習者の構成がバラエティーに富んでいるため、いろいろ違うところが多いと感じた。参加したクラスでは、相手のことを聞くアクティビティーをした(「お名前は…お国は…ご専攻は…など」。私たちは見学者であったにも関わらず、先生の配慮で授業に参加させてもらうことができ、学生の質問に答えたり、逆にその学生に聞いたりすることができた。クラスの人数が多いため、会話の練習の時間が十分とれないのが残念だと思ったが、一生懸命日本語で話しかけている学習者の態度には感心した。(朴有眞)

強く印象に残ったのは時間が短いということ。約50分でなんでも詰め込んでしまわなければならないというあわただしさを感じた。新しい学習項目を導入する際も、簡単な練習だけで全員に言わせる時間がないというのが惜しかった。あの時間では新出事項を紹介するだけで精一杯、定着までは難しいと思われる。さらに漢字の時間まであり、盛りだくさんであった。家での予習・復習、または次の授業の冒頭で復習を念入りにしなければついてこれなくなる学生が出てくるのではと気になった。(早川直子)

見学した日はちょうど personal information のところで、先生は私たち見学者がクラスに入った状況をうまく利用なさって授業を行っていたと思う。学習者にとって私たちは初対面であり、学習した表現を使うのに適した場面であった。しかし、中には質問の仕方が板書してあっても口がまだ滑らかに動いていない学習者も見受けられたので、練習の時間がもう少し長く取ればいいのと思った。全体のカリキュラムの都合だと思うが、1時間の中でやるべきことが多すぎるため、それぞれにあまり時間をかけられないのだろう。先生も限られた時間を有効に使おうと努力なさっていたようだ。しかしながら物理的に時間が短いため、一度勉強したことがある学習者だと授業にもついていくこともできるだろうが、全く初めての学習者にとってはかなり厳しいように感じた。(吉田裕子)

## 3.2 2年生

担当 : Reiko Kondo

使用教材 : 教科書『ようこそ continuing after Vol.1』

### 3.2.1 授業の流れ

■導入：ビジター紹介 紹介をする際に、なぜ日本語教師を目指したのかを聞くことで、今回導入する「～ために」の文型を学生に提示しておく。

## ■語彙練習：教科書 Vocabulary & Grammar

家の中にある物（電化製品など）の名前を用いたアクティビティー

### 3.2.2 Activity

1 文を読み，その文に沿って使用するであろう家具を答える

例) 今日はとても暑いです・・・エアコンが必要です。

## ■文型説明・練習

文型「ために」の英語での説明 「意志を表す動作＋ために」と「状態・状況＋ために」の違いを確認し，どのような場合に使用できるか例文を作る。

例) ×ケリンさんは，日本語が上手になるために，日本へ行きました。 ○ケリンさんは，日本語を勉強するために，日本へ行きました。

説明後，学習者に日本へ行った経験の有無を聞き，どのような目的で行ったかを述べさせながら，個別に練習を行う。

例) T:日本へ行った人? S:はい。買い物に行きました。T:買い物のために，日本へ行きました。

「～の～／～のための」の説明 例) 子供のゲームです。子供のためのゲームです。

教科書 全体朗読 (2 人の登場人物を，クラスを半分にして朗読)

### 3.2.3 Activity (文の変型)

例) 山本さんに会います。喫茶店で待ちます。→山本さんに会うために，喫茶店で待ちます。

### 3.2.4 Activity 11

例) 日本語がまだ下手なため(に) \_\_\_\_\_。下線部分を学習者がそれぞれ補って一文を完成させる。

### 3.2.5 感想

報告書を書きながら感じたことでもあるが，授業の流れが細かく構成されていることに気づいた。ここでは，あまり詳細に記すことができなかったが，実際の授業ではビジターを紹介しながら文型を導入し，その文型が持つ他の用法，機能を細かく説明し，適時練習を行っていた。教科書の内容だけでなく，随所に学習者の体験をそのまま，文型練習の答えに導くような活動が見られ，学習者の発話への動機を促進していたように思われたのも注目すべき点である。また，他のレベルでの授業でも共通することだが，クラスは英語圏の学生がほとんどなので，英語での文型・文法説明が可能で，日本語では説明しにくい部分まで教えることができていた。それは，共通語が存在するクラスでの大きなメリットであると思った。(小暮良幸)

折に触れ，日本の文化を織り交ぜながら授業が進められ，日本の習慣などが紹介されていた。日本語教師としては，伝統的なものから最新のものまで，幅広く日本についての情報，知識が必要で

あると実感した。それと同時に、(特に海外においては)このような文化を扱う際、学習者にステレオタイプを植えつけることがないように気を付けなければならないとも感じた。また、自分自身のことに関わりつけて発話をするように学習者を指名しながら授業が進められ、発話の機会を意識的に取り入れているように感じられた。全体を通して、日本における日本語教育との違いはあまり感じられなかったが、そもそも、自分の考えなどを伝えたり、他の人を理解する手段であることばの教育は、場所によって、それらの方法に大きな違いはないものなのかもしれない。(柴田佳夏)

授業は最初先生が文法の説明をし、学生に質問に対して答えさせる形式で行われたが、1年生より人数が多く、学生同士の会話の練習はあまりできなかった。教える先生側は大変だと思った。先生の説明の中、「日本では〇〇です…」等の説明は、学習者に日本のことに対し固定観念を持たせる恐れがあるかもしれないと思った。学習者の中、アジア系の学生が多く見られたことは面白かった。日本語は漢字圏の学生が学びやすい言語という認識があり、留学生の場合、英語で行われる授業より日本語のクラスが勉強しやすいと言った学生も見られた。しかし、英語圏の学生にも関わらず、難しい漢字をよく知っている学習者もいたので、学習者の多様性を感じた。(朴有眞)

私たち日本からの見学者の自己紹介を例にして、新しい表現を導入するところはさすが。見習いたいテクニックであった。新しい表現に加え、新出語彙に対しても、明解な説明とともに、みんながわかるまで丁寧に確認しながら進めていった。さらに、学生の当てかたについても、みんなにまんべんなく当たるように注意が行き届いていた。新学期が始まったばかりで慣れない中、素晴らしいクラスコントロールであった。(早川直子)

テスト結果の分析を詳細に行っていて勉強になった。これは時間がかかるが、教師にとっても学習者にとっても有益であると思う。見学者として自己紹介を行ったが、その際偶然にもこの日の学習項目である「～ため」を使用した。それを担当教師はうまくとりあげ、導入をスムーズに行ったのはさすがだと思った。教師としてはその場で学習者が一番わかりやすい状況を作り出すことが大切だと言われるが、状況に柔軟に対応する教師に能力も必要であることを改めて教えられた。全体的には教師対学生のやりとりが中心に授業が進んでいったが、学生は集中して授業に参加していたと思った。(吉田裕子)

### 3.3 3年生

担当 : Chako Amano

使用テキスト : 「文化中級日本語Ⅰ」

学生数 : 21名

#### 3.3.1 授業の流れ

■ 「～してもよろしいでしょうか」 教科書の会話文の音読。(先生の後に続き、学習者が読む。)

教科書に基づいた会話練習。(2, 3人のグループ→指名されたペア。ユニークな会話を創作する)

学習者もいた。)

■「～れる、～られる」 先生による口頭での説明。(主に英語を使用。)

プリントに基づいた会話練習。(タスクを理解していない学習者もいた。)

■「～ていただけませんか／ていただけませんか」 既習の敬語表現を含め、丁寧さ、ニュアンスの違いなどを英語により説明。教科書に基づいた会話練習の導入。

先生の発話の約2/3は英語であり、特に説明事項は媒介語である英語を通して行われていた。また、先生が「なぜですか?」と問うことにより、学生自身に考えさせる機会が随時みられた。

### 3.3.2 感想

許可を表わす補助動詞「～てもらう(～ていただく)」／「～くれる(～てくださる)」の解説では、それらが使われる場面を説明しながら、どの場面にはどの表現が適切かを説明していた。許可などの丁寧さの程度などは、母語話者でない学習者には非常にわかりにくい場合が多いが、説明が丁寧だったので学生にも非常にわかりやすかったと思う。また、英語の場合と比較して学習者により意識化させようとする面もあって参考になった。「あの・・・」「すみませんが・・・」などの表現にも気を遣い、より自然な発話を求めていた点も参考になった。(小暮良幸)

学習者にとって、母語にはない概念や表現などを表すことばを理解することはかなり難しいと思われるゆえ、その説明を媒介語である英語で行うことは効率的であると思われる。しかしながら、全体的に、英語による教師の説明が長く、学習者の日本語での発話の機会が少なかったように思われた。運用能力に結びつくインプットとなるようにするためには、分析的な知識と同時に、学習者がより主体的に参加する活動的なアクティビティを取り入れることも一つの方法だろう。また、敬語を理解するのに重要となってくる場面、状況を具体的に提示していたことは、学習者が理解する上で重要であると思われた。(柴田佳夏)

3年生の中には、日本に行ったことのある学生が何人かいた。他のクラスと同じように、アジア系(特に韓国人)の学生が多かった。先生の授業は、日本語と英語で行われ、主な文法の説明は英語でなされた。学習者の間にはさまざまなレベルがあり、日本に行ったことのある学生はある程度話せたが、うまく表現できない学生も見られた。「ようこそ」という教科書は、間違っているところが多く、教科書を変えるかもしれないと先生がおっしゃったが、本当に場面に合わない例が多く、学習者にそのまま練習させることは危ないため、場面や状況によって換える必要があるだろうと感じた。(朴有眞)

学生によく考えさせる先生だなという印象が残っている。30人近い学生相手に、会話を練習させるのはたいへんなのに明解な導入をなさっていた。教科書にある会話練習に参加させていただいたが、学生の中に今何をするのかわからないという教師の指示を理解していない人が何人かみられた。授業中の教師の説明はわかりやすく、進め方もテンポがいいのでだらけることなく集中して参加できる。(早川直子)

敬語、ていねいな依頼の表現の練習をしていた。1クラスの人数が多いのにもかかわらず、ペア活動を取り入れるなどしてなるべく全員が参加できるような体制を作っていたと思う。学習者間のレベル差は大きいものの、よくできる学習者はペア活動の時間に積極的に自らいろいろな文を作って練習するなどしていたので、学習者にとってもよかったと思う。学習者同士の活動をいれることは学習者が自分のレベルに合わせて柔軟に活動が行えるいい機会であると思う。活動によってはグループ活動を取り入れるのもおもしろそうである。

(吉田裕子)

## 4 全体を通しての感想

一年ぶりにオークランド大学のキャンパスを歩き回った。Albert Park の噴水・カフェテリアの匂い・長い Symonds St で会った私のこと覚えてくれていた生徒と挨拶しながら複雑な気持ちと思いが浮かんできた。懐かしかった。

三年前、2000年の真冬だった。初めて日本語の先生として教壇で立たせてくれた私の恩師であるチャコ先生に出会った。寒かったせいか緊張したせいか、面接での10分模擬授業は長かった。「タ形」の導入と活用練習の授業だった。オークランド大学での日本語教師の経験は今の私を支えている。これからの二年間は研究者として、経験を生かして、NZの日本語教育のために努力していきたい。

チャコ先生をはじめ、オークランド大学のスタッフ全員が相変わらず優しく私たちに接してくれた。NZスタイルだと感じた。特に、チャコ先生が用意してくれた見学表、そして、私の婚約プレゼントまで、細かい心遣いがありがたかった。本当に心から、感謝している。授業見学は三人の語学のベテランの先生 (Tomoko Shimoda・Reiko Kondo・Chako Amano) がそれぞれ担当している三つのレベル (Stage1・2・3) の日本語クラスを見学させていただいた。先生方一人一人のユニークな教え方が印象的だ。初級学習者の学習意欲を一生懸命に引き出そうと笑顔をたっぷりのTomoko先生、しっかりして無駄話をしないReiko先生、気楽に会話練習ができる環境を作ってくれるカジュアルなティーチングスタイルのChako先生。まだ日本語教師として未熟な私たちに、とても良い勉強になった。オークランド大学で学んだことを、いつの日か活用できるようになるだろう。

(リュウ・チャイ)